

令和 6 年度

公明党会派 都市行政調査報告

- ◆ 期間 令和 6 年 7 月 9 日（火）
- ◆ 参加議員 大竹口 武光・椎名 成・今野 祐子・工藤 進
- ◆ 調査先 岡山市
- ◆ 調査内容 岡山市電子町内会について

公明党会派 都市行政調査報告

日時：令和 6 年 7 月 9 日(火) 9：00～10：30

視察先：岡山市役所（岡山市北区大共 1 丁目 1 番地 1 号）

○ 岡山市の概要

人口 696, 280 人 世帯数 340, 187 世帯 面積 789, 995 km²

町内会数 1, 711 地区数 96 地区 町内会加入率 78.0% 高齢化率 26.9%

岡山市は、旭川と吉井川が瀬戸内海に注ぐ岡山平野に位置し、南部は地味豊かな沃野、北部は吉備高原につながる山並みが広がり、温暖な瀬戸内海特有の風土により、春・秋は快晴の日が多い。冬は厳しい季節風を中国山地がさえぎって、積雪を見るのはまれで、降水量 1 mm 未満の年間日数が県庁所在地で第 1 位となっており「晴れの国おかやま」と呼ばれる理由になっている。また、震度 4 以上の地震が、全国で 3 番目に少ないなど、非常に恵まれた自然環境といえる。

交通の要衝に位置する地理的優位性・医療・福祉・教育等の分野をはじめとした都市機能集積・政令指定都市として発信力など高いポテンシャルを有している。

町内会においては、電子町内会などを先進的に取り組んでいることから、どの様に進められているのか、このたびの視察で、学んできたい。

岡山市・電子町内会についての質問・回答

Q. 岡山市の町内会加入率が、78%で大変高く、帯広市では、H16年 76.2%であったが、令和6年 58.09%となり、防犯灯が無くなっていくなど、大きな課題となっている。岡山市の町内会加入方法は、どの様に行っているのか伺う。

A. パンフレットを配布し、町内会での防犯灯やゴミステーションの維持管理など、町内会の活動を周知している。パンフレットは、市の住民窓口に置き、転入者に渡す他、宅建協会にも置いて、町内会加入を進めてもらうなど、活用している。

Q. 若い人の町内会加入率が低い。お誘いしても、「今は入らない」と断られるケースが多い。若い人の加入率が低いことへの対策はどの様に行っているのか伺う。

A. 各自治体一緒である。マンションは特に難しい。顔を突き合わせるのが難しいので、デジタル化で進めたいとの声もある。町内会での地域のつながりは大きく、加入しないとゴミが出せない事、広報紙の配布、ハザードマップのお知らせ、災害が多い中、避難する時は

町内会毎に行うため、横のつながりが大事で、小学校・中学校・町内会活動が密着している。メールでの配信では、特殊詐欺などの情報のキャッチ。また、会員サイトなど、町内会に入っていないと見られない情報もある。紙ベースの回覧板は、一度見たら次のお宅に渡してしまうが、デジタルは何度も見ることができるなどの利点を生かし、入会を勧めている。

Q. 電子町内会について、デジタルにした方が良いと言う人や、デジタル化は誰ができるのかの声がある。岡山市は、どうか伺う。

A. 岡山市も同じで、やっても良いのではとか、反対など、両方の意見がある。紙ベースの回覧板と併用なので、主として容認していかなければならないが、デジタル化は、“便利になった”と、実感できれば良いと思う。

Q. 札幌市でもデジタル化を進めているが、なかなか普及しないとの事。どの様に進めているのか。また、地域の町内会では会長が決まらず、解散する町内会もある。高齢化が進み、70代、80代が中心に町内活動が進められている。

A. 岡山市では、デジタル講習会を行っている。質問も受け、年間 60 回ある。参加者は 50 代～60 代、20 名くらい参加している。

新興住宅街では、40 代の人も 3～4 人、講習会に参加している。

町内会長については、代行でも良く、連絡責任者がいれば良い。



岡山市電子町内会・視察

【所感】

岡山市の電子町内会について学んだが、インターネットを活用して、町内会活動や地域情報の発信、また、町内会の会員同士で、身近な出来事の情報共有を共有し合うことや、地域のコミュニティを進めて行くなど、横のつながりが強くなっていることが分かった。更には、岡山市全体が、町内会連合での文化活動等を盛り上げようとしている様子も感じた。

電子町内会システムは、①公開サイト ②メール一斉配信機能 ③会員サイト の3つの機能から成り、岡山市が無償で提供しており、委託業者による運営支援ヘルプデスクも運営していて、岡山市から委託業者への支払いもある。また、従来の、各戸への紙ベースの回覧板も、並行して行っている。

今後、帯広市においても、電子町内会に取り組んで行くべきと思うが、きめ細やかな議論が必要と思った。



岡山市・議場



岡山市役所

令和6年度 公明党会派 都市行政調査報告

◆ 期間 令和6年7月10日（水）

◆ 参加議員 大竹口 武光・椎名 成・今野 祐子・工藤 進

◆ 調査先 高知市

◆ 調査内容 難聴児補聴器購入費助成事業について

公明党派都市行政調査報告

日時 : 令和 6 年 7 月 10 日 (水) 10:00～11:30
視察先 : 高知市役所 (高知市本町 5 丁目 1-45)

【高知市の概要】

- (1) 人口 : 317,639 人 (2023 年 4 月 1 日現在)
- (2) 面積 : 309.00 km² (2023 年 4 月 1 日現在)

高知市は明治 22 年に市制が施行され、以来、戦火や震災、水害等幾多の試練を市民と行政のたゆまぬ努力によって克服し、市政の発展に取り組んできた。

平成元年には、記念すべき市制 100 周年を迎え、そして平成 10 年 4 月、32 万市民の住む中核都市として新たな時代の第一歩を踏み出した。

地勢的には四国南部のほぼ中央に位置し、西方と北方には山岳が巡り、東方には肥沃な美田が続き、南方は浦戸湾を経て太平洋に臨んでいる。

土地は相対的に低く、東・南部の湿田地帯は海拔マイナス 1.0m、市中心部の県庁舎が 3.0m、西部の旭駅前が 6.2m、筆山 117.9m、正蓮寺 330～350m、北方山岳が 400～600m という現状で、約 7 km²がゼロメートル地帯である。

雨量が多く、殊に毎年夏から秋にかけて台風の襲来が度々あるが、北に四国山脈、南に黒潮の暖流が巡る南国的な明るい都市である。

現在は中山間地域、田園地域、都市部がバランスよく調和した特色あるまちづくりを目指している。



【調査概要】

<事業概要>



身体障害者手帳の対象とならない軽度又は中等度の難聴児（者）の言語の取得、教育等における健全な発達、日常生活におけるコミュニケーションの向上及び就労場面における能率の向上を図るため、補聴器の新規購入又は耐用年数（５年）経過後の更新に係る費用の一部を助成する。

<経過>

（１）平成 23 年 4 月

平成 23 年 4 月 1 日施行の「高知県難聴児補聴器購入助成事業実施要領」に伴い、高知市においても平成 23 年 11 月 18 日に「高知市難聴児補聴器購入助成事業実施要領」を施行、平成 24 年 4 月 1 日からの適用とし、事業を開始。

（２）令和 2 年 4 月

小耳症、外耳道閉鎖症の方に対応するため、補聴器の種類に「軟骨伝導イヤホン」を追加。

（３）令和 5 年 4 月

軟骨伝導式補聴器は 30 万円と高額の上、耐用年数は 5 年で、買換えが必要なことから、18 歳未満で購入費助成を終わらせるのではなく、18 歳以上でも助成制度を続けて欲しいとの市民からの要望に基づき、18 歳時点において両耳の聴覚レベルが難聴児補聴器の助成対象者であった 18 歳以上の者についても、医師が難聴児補聴器装用の必要性を認める場合は対象とするよう改正。

<事業内容>

（１）対象者

高知市に住所を有するものであって、かつ、次のいずれかの要件を満たす難聴者及び 18 歳未満の難聴児（以下「助成対象児」をいう）の保護者。

- ① 両耳の聴力レベルが 30 デシベル以上の助成対象児で、身体障害者手帳の交付の対象とならないものであること、又は両耳若しくは片耳の聴力レベルが 30 デシベル未満の助成対象児で、医師が装着必要と認めるもの。
- ② 18 歳の時点において両耳の聴力レベルが交付対象であった 18 歳以上の難聴者のうち、医師が軟骨伝導式補聴器装用の必要を認めるもの。

（２）助成金

- ・ 基準価格の 3 分の 2 を限度に助成
- ・ 高知県、高知市、申請者それぞれが 3 分の 1 ずつ負担

<助成実績>

年度	件数		助成額
	新規	更新	
平成 23 年度	8 件	0 件	756,000 円
平成 24 年度	3 件	0 件	210,000 円
平成 25 年度	4 件	0 件	416,000 円
平成 26 年度	1 件	0 件	70,000 円
平成 27 年度	2 件	0 件	140,000 円
平成 28 年度	2 件	0 件	226,000 円
平成 29 年度	3 件	0 件	322,000 円
平成 30 年度	5 件	1 件	353,000 円
令和 1 年度	4 件	0 件	210,000 円
令和 2 年度	9 件	2 件	633,000 円
令和 3 年度	1 件	2 件	216,000 円
令和 4 年度	4 件	0 件	336,000 円
令和 5 年度	9 件	2 件	783,000 円
合計	55 件	7 件	4,671,000 円

<主な質問>

Q, 年間の予算は？

A, 今年度は 55 万 9 千円。

Q, どのような効果があるか、また利用者の声は？

A, 障がい者手帳が無い中でも助成をしてくれたことで、親御さんからは嬉しいとの声をいただいている。

子どもが主な対象者だが、子どもと友人、先生とのコミュニケーションがとれ、健全な発達が促されている。

Q, 他市の受付窓口では軟骨伝導イヤホンを設置しているところもあるが高知市はどうか？

A, 窓口に補聴器はないが磁気ループ（難聴者の聞こえを支援するための装置）という装置があり、それを貸し出している。

Q, 聞こえづらい方の対応で他にどのような事を行っているか？

A, 高知県聴覚障がい者協会との契約で週 5 日は手話通訳者を配置している。2 名体制で 1 名が週 5 日、もう 1 名が週 2 日は通訳者が随行して、必要な担当課まで行って、手話で対応している。

また、庁内だけでなく、例えば病院に行く際にも同行してくれる。

聴覚障がい者が電話したいときにも、手話で取り持つこともする。

これは、配置している 2 名の手話通訳ではなく、別途他の方に派遣してもらっている。

Q, 今後の事業拡大を考えているか？

A, 今は県の受け入れる要領があり行っているが、他市町村から要



望が上がってくれば、県が必要に応じて改正することとなる。

Q、 未成年者だけではなく全体的に耳の聞こえの悪い方への対応は考えているか？

A、 高齢者になると全国レベルの問題となり、財源がないと出来ないで、国に要望書を出しているところ。

<所感>

全国的に多くの自治体で補聴器の購入助成制度を行っているが、高知市では主に 18 歳未満の難聴児を対象としている。

小耳症と云い、生まれながらに耳介が小さい、もしくは完全に欠損している患者。また、外耳道閉鎖症は、外耳道が閉鎖あるいは極めて狭く狭窄している状態で耳の聞こえや言語発達にも影響が生じる。原因としては胎児発達の異常により先天的に生じる事もあれば、外傷などにより後天的に生じる事もある疾患である。

これらの方々に対応するため、従来の補聴器に加え「軟骨伝導式補聴器」が補助の対象になったことは、まさに困っている市民に寄り添う大事な対応であると思う。

帯広市においても、本年 7 月より介護高齢福祉課の窓口に「軟骨伝導式補聴器」を試験的に設置しているが、来庁する多くの市民に役立つことを期待する。

また、全市民の難聴者を対象にすることは財政的にも現実的ではないかもしれないが、これから多くのことを学ばなければならない未成年者に対する補助の実施は、とても意味のある事と考える。

帯広市においても、高知市の難聴児補聴器購入費助成事業を参考にすべき点があり、会派としても今後、調査研究に取り組んでまいりたい。





令和 6 年度

公明党会派 都市行政調査報告

◆ 期間 令和 6 年 7 月 10 日（水）

◆ 参加議員 大竹口 武光・椎名 成・今野 祐子・工藤 進

◆ 調査先 香南市

◆ 調査内容

- ・ 若年性認知症の当事者の方が立ち上げた、デイサービス「でいさあびす はっぴい」の取組みについて

公明党会派都市行政調査報告

日時 : 令和6年7月10日(水) 13:30~15:10

視察先 : でいさあびす はっぴい

(高知県香南市野市町深淵 179)

①香南市の概要

香南市は、高知県の東部にあり、南は土佐湾に面する市。人口は、約3万1千7百人、面積は126.46平方キロメートルであるが、2006年3月1日、香美郡の赤岡町、香我美町、野市町、夜須町、吉川村が対等合併して誕生した歴史がある。

北は山、南は海に面し、中部は里山とどのかな田園風景。何かと便利な生活と豊かな自然のバランスが良く、親しみを込めてちょいなか(ちょっと田舎)と呼ばれている。

香南市は、みかんの生産量が県内一、ニラの生産量は日本一であり、他にも様々な特産品があり、一年を通じて旬を楽しむことができる。

②香南市の福祉について

高齢者の皆様が、お住まいの地域でこれからも自立した生活ができるよう、香南市では様々な事業に力を入れてきている。

今回は、その中でも、認知症施策の中の若年性認知症についての取組みの一つを視察した。

③デイサービス「でいさあびす はっぴい」について

このデイサービスは、41 歳で若年性認知症と診断された山中しのぶさんによって、2023 年 10 月に設立された。認知症の人を含む高齢者ら 15 人を受け入れ、利用者は有償ボランティアとして、地元企業で洗車やミカンの収穫などに携わっている。



今回の視察においては、利用者が有償ボランティアに参加をされている様子を見せていただく事ができた。場所はデイサービスから車で 10 分程度のところで、内容は、マンションのお掃除であった。非常に生き生きと作業に参加をされていた。

有償ボランティアについて山中さんは、利用者が社会とつながって自分の役割を見つける意義を強調し、「介護されるだけでなく、『ありがとう』と言ってもらえる環境が大切になる」と話された。

利用者の皆様は、働けることが生きがいだとし、「自ら取り組むからこそ、仕事が向いていると思える」「孫のためにプレゼントを買うのが楽しみ」などと話されているとのことであった。

今回私たちは、市内のマンションで、ほうきとちりとりを使って利用者が掃除をする様子を見させていただいた。認知症の

方が希望を持って作業をされ、笑顔で活動されている様子は、
見ている我々を元気にしてくれるものであった。

④ 若年性認知症とは？

「若年性認知症」とは、65 歳未満で発症する認知症を言う。
若年性と高齢者での認知症の病理的な違いはなく、もちろんアルツハイマー型だけではない。

若い人の認知症の多くがアルツハイマー病で、発症の多くが
40 歳後半から 60 歳代前半の発症である。その発見は、高齢者
と違って、もの忘れでなく仕事上の失敗や奇怪な精神症状の出
現で周囲が気づくことが多いようである。

若年者の場合もエピソード記憶の障害は中核の症状であるが、
多くは、記憶の障害が他者にわからないように話を合わせたり、
うまく取りなしたりごまかしたりするので、周囲からは気づか
れないことが多いようである。一方で、年齢が若いので「物忘
れ」と思わず、「集中していなかったから。忙しかったから。」
などと違うことに振り替えてしまう。

⑤ 若年性認知症についての課題は？

- ・ 診断まで時間がかかる場合がある

若年性認知症の場合、仕事や家事、育児など社会的役割を担
う年齢層の方が発症することが多い。そのため、うっかり忘れ
てしまう場面やなんとなくやる気がない、何事に対しても億劫
になる、などの症状が現れても「日々の疲れのせい」「更年期障
害かも」というように、他の原因を考える恐れがある。その結
果、受診までに時間がかかってしまう。

また、若年性認知症の初期症状は、正常圧水頭症、脳腫瘍、うつ病、更年期障害などの他の疾患と鑑別がしにくいため、診断にたどり着くまでに時間を要する場合もある。

・就労についての支援が必要

物忘れが見られ、数日前の出来事が思い出せない場合や、大事な予定や約束を忘れてしまうことがあり、忘れた事を指摘されても、予定を組んだ事自体を忘れてしまうため、「あっ、忘れていた」と思い出せないことがある。今日の日付や、自分がいる場所がわからなくなる「見当識障害」が起こることもある。そのため、書類などに日付を書こうとしても書けない、よく出かける場所で迷子になるといったことが度重なり、おかしいと気付くことになる場合がある。

料理が上手だったのに、手順がわからず出来なくなったり、物をどこに片付けたらよいかわからなくなり、部屋が散らかってしまう場合もある。計算が出来なくなり、買い物をしても小銭を考えて出せなくなる場合もある。運転時には車線をはみ出したり、ブレーキが遅くなるなど危険運転になる事が多くなるというケースもあり、こういった様々な状況を鑑みると、若い状況であれば仕事における課題が表出することが想定される。仕事を継続できるパターンと、できなくなるパターンもあると思われるが、できるだけ仕事を続けていくためには、職場の理解も必要である。先ほど記載した、早期受診も大切であり、この2点がポイントとなると思われる。

⑥ 認知症になっても自分らしく生きていること

自分の家族が認知症になった時を想定し、どういう地域にしたいかということが大切である。今一度専門職の方々・行政の方々にも再度考えてほしいことは、「何かをしてあげる。」という発想ではなく、当事者の目線となった支援が大切であるという山中代表の言葉が印象的であった。

何かをしてもらわなくても良いと思っている高齢者の方が沢山いる。当事者の方と一緒に考えて、一緒に悩み、それが共生社会の根本的なことであろう。

⑦ 質疑応答について

質 若年性認知症という方の存在が、帯広市においてはあまり見えていないが、まず市として取り組むべきことについてアドバイスがあれば。

答 若年性認知症については早期診断が一番大切である。そのためには、若年性認知症に対応するための土台をそのまちでつくるのが大切。

質 若年性認知症になった方に生じる困りごとなどについて伺いたい。

答 なった方の置かれている状況によって、シングルマザーであったり、様々な状況があるので、必要な情報がなかなかその方に届かないことが課題である。

質 具体的な土台づくりの方法については？

答 認知症コーディネーターが重要なポジションである。その地域の状況をまず調べることもしいなければ早急に設置することが重要。

⑧ 所感

今回の視察では、【若年性認知症】というテーマにて学ぶ機会であったが、当事者である山中代表のお話は非常に貴重であった。十勝においても、若年性認知症の方がある程度いらっしゃると思定されるが、その実態については正直よくわからない。代表がおっしゃった、「まずはその地域の土台をつくる事。」という部分について、帯広市においても当然その仕組みが存在していると思うが、早急に確認し強化することが必要と感じた。

福祉において、当事者の目線になることが大切、ということはよく言われることであるが、今回の有償ボランティアの取り組みについても、なぜ有償でなくてはならないのか？という部分において、当事者である方がどれだけ喜ばれているかというエピソードからも良く理解することができた。お孫さんに何か買ってあげたいという気持ちで、コツコツとお金を貯めているということが、どれだけその方の生きがいになっているのだろうと思った。認知症になっても誰もが住みやすいまちづくりは、これから益々進む高齢化社会の中でも非常に重要である。今回の視察で学んだことを今後の帯広市の施策に活かして参りたい。



令和6年度

公明党会派 都市行政調査報告

◆ 期間 令和6年7月10日（水）

◆ 参加議員 大竹口 武光・椎名 成・今野 祐子・工藤 進

◆ 調査先 香南市

◆ 調査内容

- ・ 香南市教育支援センター「森田村塾」について

公明党会派都市行政調査報告

日時 : 令和 6 年 7 月 10 日 (水) 16:00～17:30

視察先 : 香南市教育支援センター「森田村塾」

(高知県香南市野市町兎田 702 番地 1)

①香南市の概要

香南市は、高知県の東部にあり、南は土佐湾に面する市。人口は、約 3 万 1 千 7 百人、面積は 126. 46 平方キロメートルであるが、2006 年 3 月 1 日、香美郡の赤岡町、香我美町、野市町、夜須町、吉川村が対等合併して誕生した歴史がある。

北は山、南は海に面し、中部は里山とどのかな田園風景。何かと便利な生活と豊かな自然のバランスが良く、親しみを込めてちょいなか（ちょっと田舎）と呼ばれている。

香南市は、みかんの生産量が県内一、ニラの生産量は日本一であり、他にも様々な特産品があり、一年を通じて旬を楽しむことができる。

②香南市の教育について

市内には小学校 7 校、中学校 4 校が開設されている。少子化の影響により、市全体の小学校児童数と中学校生徒数は減少傾向で推移している。

教育を取り巻く環境は、核家族化や共働き世帯の増加に加え、地域コミュニティの希薄化等により子育てに負担感や孤立感を抱える家庭が増加しており、学校教育の現場においても多様な

教育ニーズへの対応の困難さ等、さまざまな問題が山積している。こうした多様な教育課題に対応していくためには、学校における教育環境だけでなく、子ども同士や親同士がともに学びあい育ちあう環境、さらに学校・家庭・地域がそれぞれの責任を果たしながら連携して子どもたちを育てる環境をつくり、子どもたちの成長をみんなで支えていくことが重要である。変化の激しい社会のなかで、子どもたちが心豊かに育つように、また、子どもたちが、目標や夢を持って、たくましく生き抜くことができるように育つ環境づくりをめざしている。

③香南市の不登校支援について

不登校児童生徒が全国的に急増傾向にあるが、香南市においても増加傾向がみられ、放置ができない教育課題・行政問題となっている。学校に行けなくなった子どもたちのために、その居場所を設け、学校復帰（学校への安定登校）や、将来の自立を目指しての支援や指導が必要である。

④教育支援センター「森田村塾」について

教育支援センターとは、不登校児童生徒への個別相談を中心に、カウンセリング、学力補充、集団への適応指導を行い、自主性、主体性を育成し、家庭や社会生活に適応できるように助言や支援を行うことを目的に開設されるものである。

香南市には、「森田村塾」という名前の教育支援センターがあるが、この場所は、小学校や中学校へ色々な理由で登校が困難になり、不登校や不登校傾向にある子どもたちが通塾し、色々な活動「自主学習やスポーツ活動、塾外活動等」を行うことに

よりコミュニケーションづくりをしながら次の一步へ繋ぐ施設である。

「森田村塾」は、平成8年に『香美郡教育研究所適応指導教室「森田村塾」』として香南市野市町兎田の森田正馬邸を活用させてもらいスタートした。平成29年に新築し、現在の場所で支援活動をしている。子どもたちの学校生活を含め、日々の生活のなかで悩む子どもたちにとって「学校以外にも居場所はある。」ことを知ってほしいという願いがある。

⑤森田村塾の体制などについて

スタッフは支援員3名、スクールカウンセラー1名、ICT支援員1名、塾長1名が勤務している。不登校やいじめ、友人関係、子育てなどについて悩んだとき、小中学生や保護者、先生方のみなさんからの相談を受けている。職員は、相談者のプライバシーにしっかり配慮をしている。

※臨床心理士の教育相談「ほのぼの相談」は毎月第1・3土曜日の午後に実施している。

⑥塾の活動内容について

朝の活動は9時から開始。各自にて一日の計画を立てる。教科の学習や自主教材を使った学習をする。給食がある（給食センターが近くにある）。調理実習もあり、月に1～2回実施している。自主活動では、読書・音楽鑑賞・作品づくり、パソコンなどを各自で行う。みんなで軽スポーツや屋外活動をする。

週程表の活動を基本としながら、随時、自然体験・野外活動・ボランティア活動などの体験活動も取り入れている。また、

ボランティアの方や、各種機関・団体の方たちとの交流活動も必要に応じて行う。

・活動の場所

駐車場、駐輪場は広く、玄関には車いす用スロープがある。相談室や個別支援室が設置されており、細やかな児童・生徒への対応が可能。主となるホールも広く、卓球やバドミントンなどもすることができ、子どもたちが身体を動かすことができる。図書コーナーが充実しており、ラインナップについては児童・生徒が中身を決めて図書館へリクエストをしている。学習室はコロナ禍が転機となり、換気の設備などが特に充実している。机の並びは、一般的な学校の机の配置ではなく、配慮がなされた形であると思われた。調理室があり、先述もしたが、児童・生徒たちは調理実習も楽しみにしているようである。いずれは、外の運動場を整備する考えもあると伺った。

・行事などの活動について

遠足、マリンスポーツ、芋ほり、地域の清掃活動、農作物の苗植えや収穫など、バラエティにとんでいる。

・夏休み塾について

教育支援センター「森田村塾」では、夏季休業中における塾内外での学習や体験活動を通じて学校生活への意欲付けや支援を行うことを目的とし、夏休み塾を実施している。

参加状況は、1日6～7名程度。子どもたちは、無理せず自分のペースにて自分の立てた計画に沿って学習を進めている。

子ども同士の関係も良好で、リラックスして過ごされている様子が多々見られている。

⑦塾の特色・アウトリーチについて

積極的に対象者のいる場所に出向いて働きかけることを【アウトリーチ】というが、香南市では「生活上の課題を抱えながらも自ら援助にアクセスできない個人や家庭に対して、家庭や学校への訪問支援、当事者が出向きやすい場所での相談会の開催、地域におけるニーズ発見の場や関係づくりなどにより、支援につながるよう積極的に働きかけること」を行っている。

○家庭訪問・・・不登校など来所相談が難しい場合、家庭に訪問してのカウンセリング、つながりを増やすための関係づくりなど。

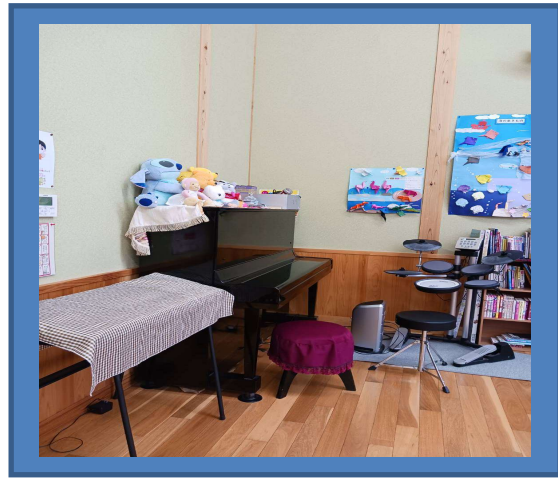
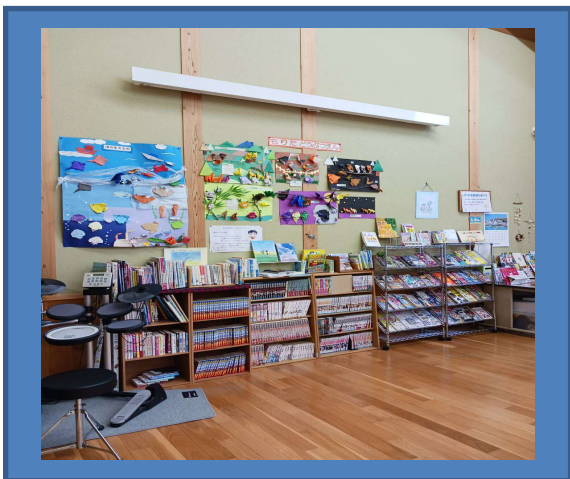
○学校訪問・・・相談ニーズはあるが、校内での対応が難しい、支援方法に困っている場合。面談や支援会（情報共有会）へ参加させていただいて見立てや支援方法などの提案、児童・生徒の観察など。

○来所相談・・・児童生徒や保護者、先生方の困り感について一緒に考えさせてもらっている。

⑧施設の様子について



本のラインナップも、子どもたちが決める形となっている。



子どもたちにとって、居心地の良い空間となるような配慮が随所で行われている。



質 素晴らしい施設だと思った。塾として一番大切にしている部分について教えてほしい。

答 やはり、学校で何か嫌なことがあったであろう子どもたちを塾でしっかり元気にし、その上で学校の先生と連携をして、学校の子どもたちの席の座布団をあたためておいてもらい、子どもたちが、「学校に自分が戻る席がある。」という認識を持ってもらうことが大切であると思っている。

質 今後の課題についてはどのようなことがあるのか？

答 家庭にひきこもっている方の把握、高校と各自治体との連携などがあげられる。また、教科的支援か教育相談的支援か、どちらが大切かという判断をするかも課題としてあげられる。

質 兄弟での不登校の相談が帯広市ではあるが、森田村塾ではどうか？課題は？

答 当然、香南市でも兄弟の不登校のケースがあり、確かに対応が難しい部分もある。しかし、基本は変わらず、寄り添った対応をベースに、学校や家庭と連携して対応していく。

⑨所感

帯広市においては、現在教育支援センター「ひろびろ」があるが、建物が古く、見学に来た子どもたちが「また来たい。」と思えるような工夫が必要な状況があり、今までもトイレを和式から洋式に変えたり、センター内のレイアウトを子どもたちのために変更したり、物品もリニューアルしたりするなど取り組んできた。

建物を提供してくださっていた方には本当に感謝しているが、この度議会において、いよいよ今後の移転の話が具体化したとのことであった。

今回視察させて頂いた「森田村塾」は、理想的な教育支援センターの形であった。この報告にも記載した通りであるが、児童・生徒たちに目線をしっかり合わせたハード面の整備がなされていると思った。また、対象者についても、他の市町村の児童・生徒でも合意があれば可能としたり、卒業生の継続的支援も可能とされていたりといったところが素晴らしい。条件整備については、報告内に記載した部分もあるが、送迎に関して、必要に応じて塾所有の公用車での送迎が可能と聞き、これもまた画期的であると感じた。条件整備の補足であるが、ＩＣＴ機器等については、学校と同じように準備がされており、ＩＣＴを活用した学校との連携（コロナ禍であったようなオンライン通信）がなされているのも良いと思う。

次にソフト面についてであるが、まず塾長の想いが非常にまっすぐで熱く、そして木漏れ日のようなあたたかさも感じられるものであったことが印象的であった。話のすべてにおいて、子どもたちの気持ちに寄り添っている姿勢が見られ、子どもたちを地域

の宝物と、心から思われていることが伝わった。

具体的には、まず、学習室においては、「勉強をする。」というプレッシャーがない状態をつくっている。どこまでも子どもたちの自己決定を尊重している対応がそこにはある。そして大切にしているのが、各学校が実施する支援会に参加をすることである。支援会では、「家庭から」、「塾から」、「学校から」、そして「今後に向けての話」をシンプルに行っている。【つなぐ】というキーワードを胸に、この支援会への参加が大切なポイントになっている。

森田村塾では、【安心できる居場所づくりから絆づくりへ】という言葉大切にしている。そこには、支援者と児童・生徒との信頼関係の構築が重要になる。基本は子どもを担当する支援員が決めることになるが、森田村塾では、全職員でどの子にもかかわっている。どうすればできるようになるのかを常に皆で考え、支援を行っている。

支援については、学校の先生方の地道な努力が子どもたちを動かすことになる。当然復学のみを目標として考えているわけではない。しかし、子どもたちが学校へ戻りたいと考えているケースは多く、そういったケースにおける子どもたちの目標は、【復学】となる。学校の先生が、何度も塾の子どもの様子を見に来ることが、絆を深めていくことになる。もちろん、子どもが嫌がるケースもあるようだが、そこは無理をしないで少しずつ進めていく。丁寧に時間をかけ絆づくりなどに取り組んだ結果、多くの子どもたちが登校することができるようになったとの話を伺い、想いは必ず届くのだと感じた。

錆が出るようになった蛇口（子どもたちの心）をしっかり洗

うのが森田村塾で、子どもたちが戻る学校の席の座布団をあたためておいてもらうのは学校の先生である、と塾長は語った。なるほどと思った。子どもたちとの絆を回復させ、絆を強めていき、塾と学校の連携を強固なものにしていく。気を付けなくてはならないのは、そこに、子どもたちがあくまで中心であるという考えをぶれずに置くことであろう。

今帯広市に必要なものという部分で、香南市の教育支援センターについての視察は、非常に実りが多いものとなった。視察の内容を、今後にしっかり活かしていきたいと思う。

